

神皇紀（富士古文書）に記されている日本の古代と徐福について

つこし よしやす  
神奈川徐福研究会 津越 由康

## 1. はじめに

2012年9月に中国浙江省寧波市で開催される予定であった徐福東渡2222周年記念・象山国際徐福文化セミナーが直前に突然中止となった。

私はこのセミナーに論文を提出していたが、この中止によってこの論文も陽の目をみる事が無くなってしまった。

今回、佐賀徐福会が徐福渡来2225周年の行事で「徐福を語るフォーラム in 佐賀」が開催され、良い機会であるので、象山に寄稿した論文を基に、更に手を加えて、神奈川徐福研究会の活動の一つとして翻訳した「神皇紀」について、発表させていただこうと思います。

## 2. 神皇紀・富士古文書について

### 2-1 神皇紀の現代語訳

神奈川徐福研究会（田島孝子会長）では、90年前に富士古文書を最初に世に紹介した三輪義熙著「神皇紀」の現代語訳に取り組みました。

富士古文書は徐福が編纂したといわれており、神奈川徐福研究会では、徐福が遺した貴重な日本の古代の記録を紹介したいとして、現代語訳「神皇紀」を2011年3月に出版しました。（残念？ながら、ご好評のうちに2014年末に完売となってしまいました。）



現代語訳「神皇紀」

### 2-2 富士古文書とは

富士古文書とは山梨県富士吉田市の宮下家に保存されていた日本の古代史に関する文献の集合体である。徐福が編纂したという伝承により「徐福文献」ともいわれている。

徐福が到来した時、文字をもち歴史を伝える役割をしていた36神戸（36の家系）が存在していた。彼らもっていた記録や伝承、口伝などにより、徐福は渡来以前の日本の超古代史を編纂した。徐福の死後もその子孫がその後の歴史の記述を加えていった。

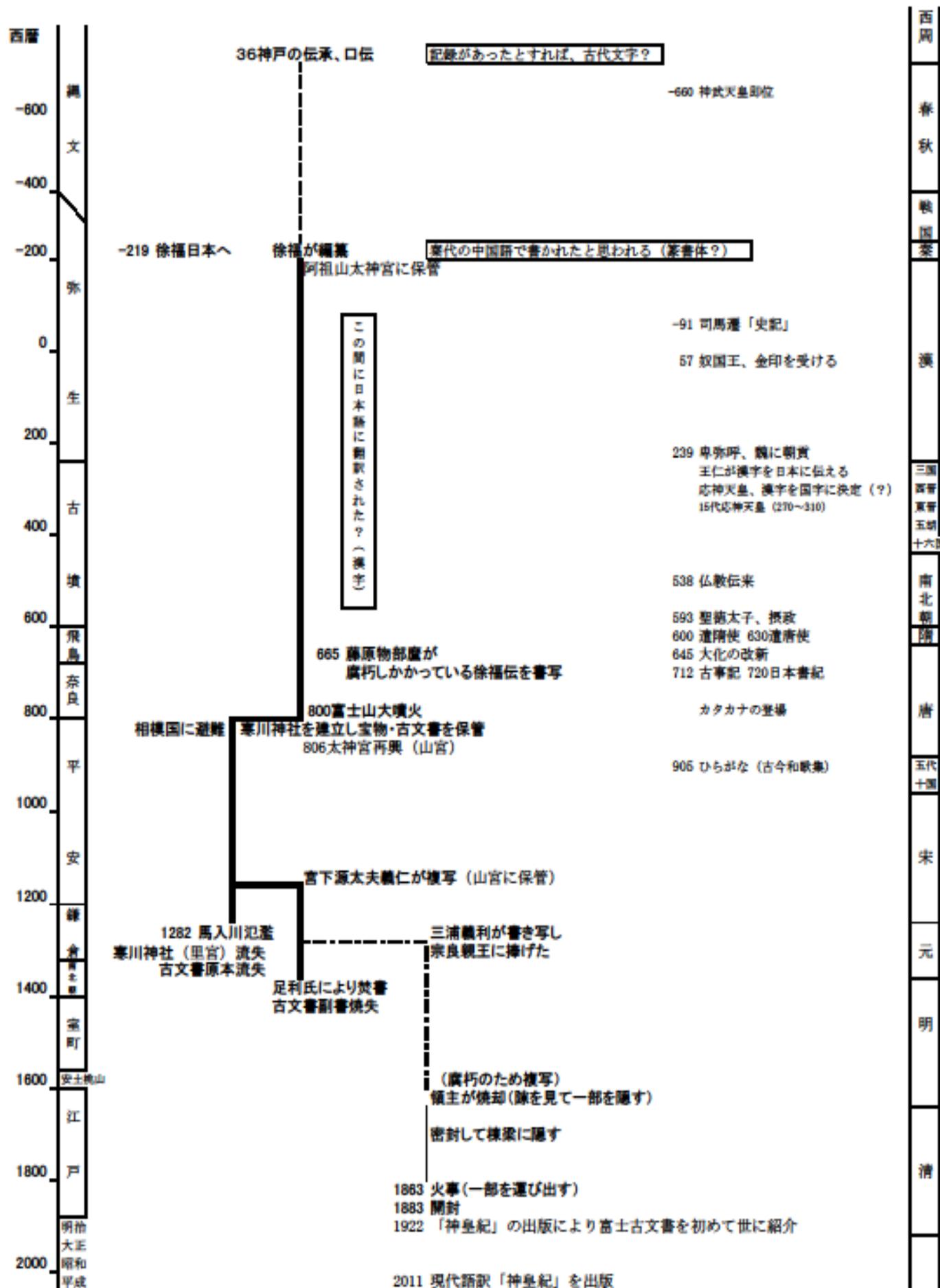
これらの古文書は阿祖山太神宮の宝物として保存されていたが、800年に富士山大噴火があり、宝物を持って相模国に避難、そこに移住し、寒川神社を創建し、伝来の古文書をここに保管した。そのため「寒川文書」とも呼ばれる。

ところが、1282年、相模川の大洪水のため寒川神社は流され、古文書も流失した。

幸いなことに小室浅間神社の49代宮司・宮下源太夫義仁（1192年逝去）が筆写していた古文書の写しが富士山元宮大神宮に伝えられていた。

その後、足利氏により焼却されたりするなど幾つかの災難にあったが、焼け残った古文書（写し）を家人が隠し、宮下家の棟梁に密閉し隠蔽され、明治16年（1883年）開封された。

## (参考) 富士古文書の経緯



## 2-3 「神皇紀」とは

三輪義熙が30年にわたり、富士吉田市の宮下家に伝わる富士古文書を調べた。古事記・日本書紀では一人と思われていたウカヤフキアエズ尊が、同じ諡名を襲名して51代続いていたことが記されており、これに驚き、世に知らせようと、「神皇紀」を大正11年（1922年）に出版した。

当時、大反響となったが、ある学者が偽書であるとしたため「富士古文書」は再び埋もれてしまった。

### 2-4 古文書に記されていた驚くべきこと

- 日本の神々の先祖について、古事記・日本書紀より古い神々の系図が記録されていた。
- 高天原は富士高原にあった。この不二阿祖山太神宮で代々の天皇即位式が行われていた。
- ウカヤフキアエズ尊が一人ではなく、同じ諡名を継承して51代続いていた。
- 神皇の名だけでなく、後の名も記録されている。
- 神話的な記述が無く、史実のように記されており、特に神武東征の力所は詳細である。など

## 3、古文書に書かれている古代の概要

この中で日本の始まりに深くかかわりのある記録を少し紹介してみたい。

### 3-1 神農氏の子が富士山麓に来て富士高原を高天原とした

開闢元始の神は天之峰火夫神（アマノホノ）といい、この神から22代は日本列島の外にいた。この22代目の神を高皇産霊神（タカミミズ）といい、諡天之神農氏神、諱農作比古神という。高皇産霊神（タカミミズ）は2人の子に「日の本にある海原にこの世に二つとない蓬莱山がある。これに天降り蓬莱国を治めよ。」と命じた。

まず①国常立尊が蓬莱国を目指して出発したが、消息がわからなくなった。

そこで国狭槌尊が父母と共に3,500神を率いて大海原に出発し、対馬、壱岐、隠岐、佐渡を経て能登に上陸。加賀、若狭、因幡、但馬、播磨、丹波と進んだ。そして、飛騨の山に登ったところ東南に蓬莱山を発見、木曾、三河、駿河と進み、蓬莱山に着いた。この山は火が燃え、日に向かっていたので、日向高地火の峰と名付け、その大原野を高天原と名付けた。とあり、神農氏の子、国狭槌尊が日本に上陸し、富士山の麓に止まり、高天原としたことが書かれている。

### 3-2 スサノオが天照を攻める

②国狭槌尊 ③豊斟淳尊（トヨクム）④泥土煮尊（ウジニ）⑤大戸道尊（オホノジ）⑥面足尊（オモトル）⑦伊弉諾尊（イザナギ）と続き、①天照大御神（アマテラスオホミカミ）が豊阿始原瑞穂国の王となった。

このとき高皇産霊神（タカミミズノカミ）のひ孫の多加王（タカノ）が豊阿始原瑞穂国を占領しようと大陸から攻めてきた。

大御神はこれを防ぎ収めたが、このため天照大御神は天の石窟に籠ってしまった。

天照大御神は多加王に「心を入れ替え、荒振る神達を平定すれば、命を助けよう。」と詔りし、多加王は心を入れかえることを誓い、天照と姉弟の契を結ぶこととなった。後にスサノオ命と名付けられた。

### 3-3 九州に遷都

②天之忍穗耳尊（アマノホソミ） ③天日子火瓊々杵尊（アマツヒコホノニギ）と続き

④日子火出見尊（ヒコホデミ）の時代に西大陸より大軍が攻めて来た。そこで内地を統治しつつ外寇を防ぐには、神都を筑紫に遷すことがよからうと富士高原から九州に遷都を決めた。

⑤鵜茅葺不合尊（ウカフキアズ）は筑紫に向い、軍勢約十万余神で賊軍を西北方面に撃退した。これにより霧島山を神都と定め、不二山の名を踏襲して新都も同じく日向高千火峰と名づけた。これより旧都（不二山）高天原を天都といい、新都（筑紫）を神都ということになった。

### 3-4 同じ諡を襲名するウカヤ朝が51代続いた

33代鵜茅葺不合尊（ウカフキアズ）の時、殷の国の紂辛王が周の武王に滅亡させられた。紂辛王の第3子の対馬王が持って来た殷国の暦の書を神皇に献上した。

### 3-5 神武東征

第51代鵜茅葺不合尊（ウカフキアズ）の時、禍津彥理（マガツリ）命が反逆し、紀伊国の長髓彦（カスネヒコ）を総司令官とし、全国を乗っ取ろうとした。しかし、神武天皇がこれを平定し、都を大和国の橿原に定めた。これが日本国の始まりである。

記紀でいう「神武東征」について、富士古文書には戦記小説のように詳しく記録されている。

この戦いの途中、51代鵜茅葺不合尊は体調を崩し、崩御され、伊勢の陵に葬られた。

そしてここから不二山の高天原の神々を遥拝した。伊勢から高天原を遥拝する御崎は孝霊天皇の時代になって二見ヶ浦と名付けられた。

その後、垂仁天皇25年（BC.5年）天照皇太神宮を大和から伊勢に遷宮した。これが伊勢の神宮である。

以上、古文書に記されている超古代の日本の一部を簡単に紹介した。

日本の神話では高天原は九州の高千穂にあったとされている。しかし、富士古文書では最初の高天原は富士高原にあったと書かれている。

ここで、それが事実であったかもしれないと思われる事を紹介してみたい。

伊勢の神宮は日本の皇室の祖神として天照大御神を祀り最も崇められている。この伊勢神宮に参拝する前に、二見ヶ浦の海水で禊をしたり、ここからの日の出を拝む習わしがある。

夏、二見ヶ浦の日の出は夫婦岩に張られた縄の間から昇ってくる。そして夏至の頃には海の彼方200km先にある富士山と重なり、「ダイヤモンド富士」となる。日の神・天照とその神が最初に祀られた富士山の高天原が重なっている。古代人でなくても現代人にとっても、思わず手を合わせて拝んでしまう幻想的な瞬間でもある。

このことは、二見ヶ浦から日の出を拝むことは、単に日の神・天照を拝むことだけではなく、東の彼方の最初の高天原を遥拝しているという意味が込められていたのではないだろうか。

（右写真は 富士山から昇る日の出  
2011.6/29 李相海さん撮影、  
インターネットHP日本紀行より）



#### 4、神皇紀（富士古文書）に書かれている徐福について

##### 4-1 始皇帝への進言

秦始皇帝3年（BC. 219?）春、皇帝が東方を巡回し、朝嶧山から東海を遙したとき、徐福は「東海の蓬莱・方丈・瀛州の三神山に大元祖々の神仙が住んで居り、不老不死の良薬があります。」と申し述べた。皇帝からその良薬を求めるよういわれた。

徐福は「これを求めるには15年から30年を要します。それ故、相当の旅支度が必要で、金銅鉄砂鉄珠玉及び衣食器具、それに大船85隻が要ります。」と申し上げた。皇帝はその要求通り支度させた。

##### 4-2 徐福渡来

徐福は同年6月、金銀銅鉄、五穀衣服、器具その他諸々の品々、食糧を積んで、童男童女500人とともに大船85隻に分乗して蓬莱山を目指して出発した。しかし海上で蓬莱山を見つけたものの、それを見失い、同年10月に熊野（新宮市）に上陸した。そしてここに留まって不二蓬莱山を探した。3年程かかって東方にそれを見つけ、再び船に乗り、駿河の浮島原（富士市田子の浦）に上陸し、富士山麓の阿祖谷小室家基都（富士吉田市）に到着した。先ず阿祖山太神宮をはじめ、各七廟に拝礼した。更に、大室の原に止まった後、中室に移った。童男童女五百余人は中室、或いは大室に住居を定めた。

（疑問の証明）徐福一行は熊野から富士山をどうやって探したのか？

富士山（不二山）はこの世に二つと無い美しい形をしており、誰が見ても神の居ます蓬莱山と信じ、思わず拝んでしまう荘厳な山である。それ故、徐福一行は富士山を目指したと思われる。

では、熊野にいてどうやって富士山を見つけたのだろうか？

熊野の新宮と富士山は直線で300キロメートル以上離れている。地球の丸みのため熊野の平地からは富士山は見えない。

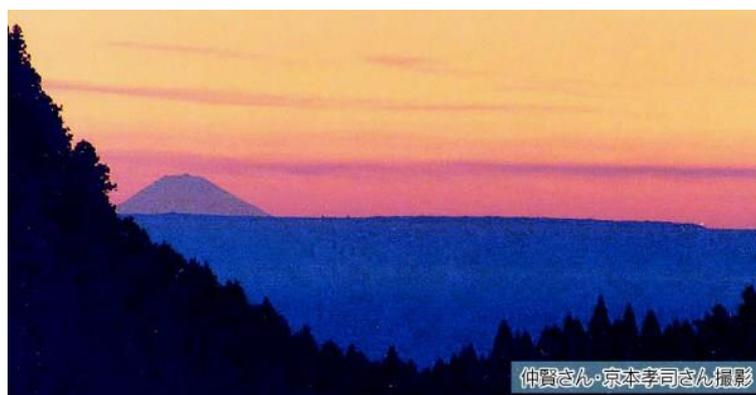
しかし、子供の頃、長老から、那智の山奥から富士山が見えると、聞いたことがあった。この紀伊半島南部にある標高1000m級の大雲取山一帯は世界遺産の熊野三山の一つの那智の滝の水源の森でもある。

約20年前（1995年12月）、地元の写真家が標高750メートルの妙法山から東方に320キロメートル離れた富士山の撮影に成功し、それが確認された。

富士山が見えるのは好条件が重なる冬の空気の澄んだ日の早朝で、一年に数えるほどしかないといわれている。

海の水平線上に延びた志摩半島の上に富士山の7合目あたりから上が生えているように見える。今や妙法山のこの場所は富士見台と名付けられた。この妙法山に連続する大雲取山一帯が、日本で富士山が見える最遠の場所となっている。徐福一行もここから不二蓬莱山を見つけたに違いない。

（連雲港・熊野 2010 徐福フォーラム  
寄稿論文より抜粋）



322キロ離れた、和歌山県那智勝浦町色川富士見峠よりの富士山  
熊野灘にのびた志摩半島の先に2800m付近から上が見える  
（インターネット日経新聞HPより）

#### 4-3 徐福一行

徐福・妻福正女・長男福永・姫白蓮女・二男福満・三男徐仙・四男福寿・長女天正女・二女寿安女・三女安正女・孫一丸・同次正女・以上12人。

老男35人、老女45人。妻ある男138人、夫ある女145人。青年男子41人、成年女子43人。幼児男子51人、幼児女子48人。以上合計558人であった。

#### 4-4 徐福死去

BC. 208年2月8日、徐福は中室において亡くなり、中室麻呂山の峰に葬った。神代からの事跡を世に伝え、文学を教え、機織（はたおり）を人に授けるなどわが国に貢献するところが大きかったので、時の人は神祇のように厚く祀った。中室の麻呂山の徐福神社がこれである。

#### 4-5 徐福出生

徐福は軒轅氏の四男忠顛氏の子孫である。忠顛氏5世の子孫の萬正氏は夏禹王に仕え農作事業を受持った。

萬正氏48世の子孫、正勝は文学を学び地理に詳しく周の武王に仕えた。徐の姓を頂き楚の国の首長に任ぜられた。正勝27世の子孫の子路は孔子の門に入り、子孫代々儒学で名を成した。子路から5世後の范睢は秦王に仕え、斉知の娘実永婦人を妻にして徐福を生んだ。

徐福は名を徐子（又は徐市）といった。徐福はその通称名である。広く儒学を学び後、天竺（インド）に渡り仏教を7年に亘り研究、勤勉に励み一切の経の奥義を極めた。後、薬師如来の仏像を携えて帰国した。秦王朝に仕え功労も多かった。官位も次第に昇進、非常に重用されて宮中仕えの女官福寿婦人を頂いた。通称名を福正婦人という。徐永の女である。

#### 4-6 徐福子孫

長男福永は父の跡を継ぎ、名を福岡と改めた。



徐福の長男の子孫の墓がある  
神奈川県藤沢市の妙善寺



妙善寺にある福岡家の墓



徐福のことが記されている墓石

二男福萬は名を福島と改め、父の遺言により最初に上陸した紀伊国熊野に一族郎党五十余人を連れて移住し、その地を開墾する事になった。後になってその子孫は社祠を造営して徐福の霊を祀った。熊野山の徐福神社がこれである。



世界遺産・熊野速玉大社



蓬莱山を神奈備として祀る阿須賀神社ここに徐福が祀られている



速玉大社の社家・楠氏の屋敷跡に建つ徐福の墓（新宮駅前徐福公園）

三男徐仙は福山、四男福寿は福田と改めた。

息子達並びに童男童女の子孫は、大いに阿祖谷の内外で増え栄えた。多くは秦を姓とし、又、氏に福の一字を付けた。

#### 4-7 徐福直系

第四代福仙は阿祖山太神宮の神官に任命され、子孫代々その職を継承した。

延暦19年(800年)富士山の大噴火により、元宮七廟総名阿祖山太神宮の大宮司は第三十代福岡徐教と共に、徐福伝・寒川日記・その他の古文書及び宝物を擁護して相模国に避難し、寒川神社に宝蔵を造営して持って来た古文書・宝物を納めた。以後、福岡徐教はその地に居住し同神社の神官になり、宮司と共に代々、古文書を保護した。



相模国一宮・寒川神社

これらが古文書に記載されている徐福についての概要である。

#### 5、おわりに

以上、「神皇紀」から日本の古代と徐福についての記述を紹介させていただいた。

富士古文書が洪水で流されず、また、時の権力により焼かれたりしなければ、もっともっと多くの記録が残っていたはずである。そうであれば日本の神話や徐福渡来伝説は、歴史として語られているであろうと残念でならない。

私たち神奈川徐福研究会では、更なる研究のため、富士古文書のうち徐福が直接記録したといわれている「徐福十二史談」の翻訳に取り組んでいる。

以上

(参考) 富士古文書にある富士山の呼び方の経緯

不二山 → 福地山 → 富士山

すべて 「ふじさん = FUJI SAN」と発音します。

蓬莱山 → 不二山 国常立尊が名付けた

不二山 → 福地山 崇神天皇五戊子 (BC. 93年) に改名

福地山 → 富士山 平城天皇大同元丙戌年 (806年) に改名